

応援！学校の感動印

青島健太が語る 連載コラム 第4回

★鎌倉学園中学校・高等学校 応援団



青島健太、時の流れを超えて変わらない夏に感動

学校はいろいろな感動であふれています。スポーツライターの青島健太が学校を訪ね、自らの感激を熱くレポートします。第4回は神奈川県鎌倉市、鎌倉学園・応援団を訪問しました。

Kamakura Gakuen Junior & Senior High School



「いい国作ろう鎌倉幕府」
いくら彼らにパワーがあっても、192年の頼朝まで時代を遡ることはできない。しかし、20年30年、いや50年なら戻ってみせる。第五十六代鎌倉学園応援団。彼らは、タイムマシンの乗組員よろしく、様々な儀式の末に、集まった人たちを時空を超えた世界に連れていく。

7月21日、相模原球場。気温34度。集合した団員たちが、4列横隊に並び厳しい表情で前を見つめる。その視線の先には、団長の青木翔平(高3)がいる。「応援団、今日も頼むぞ。」通りがかったOBが声をかける。その声に応えるように青木が抑えた調子で櫓を飛ばす。

「明後日の横浜スタジアムでも『根性汁』(部員手作りのレモン水)

が飲めるように、気合いを入れて応援するぞ。ひと口ひと口味わって飲め。」

そう言うと団長は、自ら見本を見せるように一升ビンに入ったその汁をゆつくりと飲む。そして、その後は、用意された4本の根性汁を全員でしっかりと回し飲みしていく。時空を超えるには、体力と水分の消耗が激しく、根性汁をたっぷりと飲んでいくことが伝統になっている。

飛行機に乗るパイロットや乗組員同様、時間を遡る旅にも制服がある。真夏でも上着は黒い学ラン。ズボンも伝統のシルエツト、「ドカン」と呼ばれる超極太のストリートと決まっている。応援団では、ズボンも肝玉も太いものが好まれる。団長は代々受け継がれているズボンをはき、先輩から譲り受

けることができなかった者は、ネットオークションで廉価なものをゲットした。この進取の精神も彼らが人知れず身につける応援団ならではの行動だ。

前の試合が終わり、いよいよ全員が配置につく。演壇の上には、下級生によって塩の山が作られる。その量きっちり2kg。使う塩



の銘柄も決まっていれば、塩を固める水も根性汁の残りを使うのが鉄則だ。

団長の青木が、きれいに盛られた塩の前で高々と足を上げスタンドの注目を集める。そして最後にこの塩をひと蹴り。塩を粉々に蹴散らして「塩蹴り」と呼ばれる儀式で場を清めるのだ。

試合が始まると、もう応援団には休む間はない。それぞれが無心になって、自分の役割を果たしていく。

一進一退。緊迫した試合が続く中、5回、スタンドに大きな笑いが湧きおこる。どういわけだか応援団全員が中腰の姿勢でじっとして動かない。そして演壇の中央にいる青木が、とんでもないバカ顔をしてスタンドの笑いをとる。その顔は、世界のナベアツが3の倍数で見せるあのアホ顔以上にへんな顔だ。これも伝統



青島健太

スポーツライター・キャスター
昭和33年(1958)4月7日、新潟県新潟市生まれ。春日部高一慶応大一東芝と進み、昭和60年(1985)ヤクルトスワローズに入団。5年間のプロ野球生活引退後のオフ、半年間の研修の後オーストラリアへ日本語教師として渡り、厳しいプロ野球生活の中で忘れていたスポーツをする喜びや、楽しみ方を思い出し、その素晴らしさの伝え手となることを決意し帰国。スポーツライターとして新しい道を歩き始める。現在はあらゆるメディアを通して、スポーツの醍醐味を伝えている。鹿屋体育大学、流通経済大学、日本医療科学大学 客員教授

